

心理コーディネーターになるために Vol.22

山下桂永子

☆来年度研修予算



2学期が始まって間もなくのころ、事務作業をしている私に、教育相談担当の指導主事であるA先生が、「山下さん、ちょっとこれ見てほしいんですが、相談員さんの研修予算で、上からは5%カットって言われてましてねえ。。。」と、ぱつの悪そうな表情で1枚の用紙を差し出した。用紙には今年度の研修予算が書かれている。

私は立ち上がってそのメモをのぞき込み、「えー、5%カットですかあ。。。とりあえず、来年度必要な研修費をわかる範囲でピックアップしてみます。根拠になっている研修とか研修費が今年と変わることもあると思うので。ちょっとその数字控えさせてください。いつまでにお伝えしたらいいですか？」と手元のメモに書き込みながら渋めの表情で言う。

A先生は少し意外そうな顔をして、「あ、急ぎで申し訳ないんですけど、明日まででして〜。」私が「わかりました。今時間あるのですぐ確認しますね」と返すと、A先生は「わかりました。お願いします」と席へ戻っていった。

A先生としては、上から「5%減らせ」と言われているわけなので、研修費から5%分引いて数字を書き換えれば来年度予算案は作れる。それを教育相談に関わることだからと、わざわざ事前に私に確認してくれたのである。私としてもそれはありがたいことなのだが、つつい渋い顔をしてしまった。A先生にしてみれば、確認するくらいのつもりで聞いただけなのに、「ちょっと待った」が出るとは思っていなかっただろう。



☆研修予算の根拠

申し訳ないなあ。でもノーガードで通すわけにはいかんのだよ、と思いながら、私は今年度予算に挙げた研修費の内訳を確認する。研修元のホームページで費用が変わっていないか、教育センターで実施している発達検査が新しいバージョンになって研修が増えていないかなどを調べ、簡単なメモを作成して A 先生のところへ向かった。

「A 先生、先ほどの研修予算なんですけれど、よろしいですか？」

A 先生の横に立ち、「一応、簡単なメモにしてみたんですけど、見てもらっていいですか？」と説明を始める。

まず B 検査の研修は、今年度は申し込んだものの抽選で外れてしまい、誰も受講できなかった。そのため執行実績はないが、一昨年に新しいバージョンが出たばかりで版元が研修受講を推奨していること、さらに来年は検査項目の追加も予定されていることから、来年度も同額の予算を確保してほしい。

次に C 検査の研修は、受講しないと検査用紙が入手できない。昨年申し込んだ相談員がいるが、受講まで 1 年以上待つ状況で、おそらく年明けには受講できるので、その費用が必要になる。今年度中に受講できれば来年度は 1 名分削減できる。

D 研修会については、今年相談員 8 名中 6 名が申し込み、抽選で当選した 4 名が受講した。最新の文科省のデータや教育相談の今後の方向性を知る貴重な機会なので、来年度も 8 名分は確保したい。

そんな説明をあれこれ続けた後で、「というわけで、来年度については減らすならこことこの 2 名分です。それで 5% 減になります。いかがでしょうか」と締めくくった。

A 先生は真剣に話を聞いてくださった後、「OK です！なるほどなるほど！そのメモ、コピーいただいても？」と言う。

私が「いや単なるメモ書きなので、こんなんでもよければ差し上げます」と返すと、「ありがとうございます！根拠とこのメモあるとめっちゃ助かります！」と笑顔になった。



私も「一昨年に B 検査が新しくなって、昨年は予算を少し増やしていただいたので、来年度 5% ならぎり耐えられますけ

ど、再来年度また減らされたら本当にきついですよ～。よろしく願いしますね～」と笑顔で返し、席へ戻った。

ちなみに指導主事の先生は1～2年ごとに人が変わるのでご存じないのだが、この一連の流れとやり取りはここ数年ほぼ毎年同じである。同じなので私に戸惑いはないが、げんなりはしている。

☆削られ続ける予算

研修費は、私がこの仕事を始めた20年前から予算に組まれていたわけではない。心理指導員として働くようになってから、さまざまな経緯があって数年前にようやく実現した予算である。

それなのに、毎年毎年「数%カット」が前提で話が進む。研修費に限らず、人件費、消耗品費、書籍費、修繕費など、教育相談に関わる予算は少しずつ削られていく。予算と一緒に、こちらの気持ちも削られていくような気分になる。

☆^{しっかい}悉皆研修への羨望

教育センターには教職員研修担当という部署があり、学校の先生方や職員向けの研修を企画運営している。

その中には「^{しっかい}悉皆」と呼ばれる研修がある。対象者全員が必ず受講する、いわば必修研修である。教員としてのスキル維持・向上のために当然のものとして提供されている。無料で。無料どころか勤務時間内に実施されるので給料まで発生している。

受講する先生方は大変だろうと思う一方で、その「悉皆」という言葉に私はずっと羨ましさを感じていた。

同時に、「いやいや、おかしくないか？ 臨床心理士って資格維持にもお金かかるんやで？ 維持するための研修費もばかにならんのか？ 臨床心理士前提で雇っというて、その資格維持にはお金出えへんとかおかしくない？」という嫉妬とも怒りとも言える感情も抱いていた。



☆同じ仕事、違う待遇

教員との待遇差にはあこがれ、嫉妬の感情であったが、そのほかにも思うことはあった。その昔、一日 8000 円・交通費なしの教育相談員として働いていた時代、別の場所ではスクールカウンセラーとして時給 5000 円で働いていた。

同じ臨床心理士として働いているのに、求められている業務は大きく変わらない。にもかかわらず、かたや日給 8000 円交通費なし、かたや時給 5000 円交通費ありである。

なんとも言えない違和感と憤りを覚えていた。

これは「同一労働同一賃金」という言葉が広く知られる少し前の話である。もっとも、その議論は正社員と非正規雇用の格差として語られることが多かった。一方で、教育相談員もスクールカウンセラーもどちらも非正規雇用である。

だから社会問題として取り上げられることはなかったが、今の保育士やホームヘルパーなど、専門性の高い福祉職の給与が低いと言われる問題と、どこか通じるのかもしれない。

とにもかくにもやはり教育センターで相談員として働くのに、教育相談のスキル維持向上のため、研修費を出してほしいと思い、何度も当時の上司に相談した結果、数年後、正社員と非正規雇用との格差問題の社会化もあいまったおかげなのか、研修費用が予算化されることになった。

☆予算化のその後

そして勝ち取った予算は、過不足なく執行しなければならない。執行が少なければ、翌年には「余っていた」と判断され、大幅な削減につながる。

そのことを知らず、人件費を大幅カットされたときにはずいぶん怒ったり落ち込んだりしたものだ。今となっては、税金で行われる行政サービスである以上、納得いかないことがあっても、その必要性を時代の流れに合わせながら説明し、予算化につなげていかなければならないことは理解できるようになった。

今後も明確に教育相談を言語化し、予算につなげていくことが心理指導員として私の役割だと思っている。

